

AR CA DIA

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



岡崎市美術博物館

62
AUTUMN 2014



眼の極楽⑬ 江戸の花園

館長 榊原悟

定家詠月次花鳥和歌

その定家が十二月、各月にちなんだ花と鳥は、次の通り。

正月 柳 鶯

うちなびき春くる風の色なれや日をへてそむる青柳のいと

春きてはいく夜も過ぎぬ朝といで鶯きある窓のむら竹

二月 桜 雉

かざし折る道ゆき人のたもとまで桜に匂ふきさらぎの空

かり人のかすみにたどる春の日を妻どふ雉の声に立ちらむ

三月 藤 雲雀

ゆく春のかた見とや咲く藤の花そをだに後の色のゆかりに

すみれ咲く雲雀の床に宿かりて野をなつかしみくらす春かな

四月 卯花 郭公

白妙の衣ほすてふ夏のきて垣根もたわに咲ける卯花

郭公しのぶの里にさとなれきまだ卯花の五月まつころ

五月 盧橘 水鶏

郭公なくや五月の宿がほにかならず匂ふ軒のたち花

まきの戸をたたく水鶏のあけぼのに人やあやめの軒のうつり香

六月 常夏 鶉

大かたの日かげに厭ふ水無月の空さへ惜しき常夏の花

みじか夜の鶉河にのぼる篝火のはやくすぎ行く水無月の空

七月 女郎花 鶺鴒

秋ならで誰もあひみぬ女郎花契りやおきし星合の空

ながき夜にはねを並ぶる契りとして秋まちわたる鶺鴒のはし

八月 鹿鳴草 初雁

秋たけぬいかなる色と吹く風にやがて移ろふもとあらの萩

ESSAY

眺めつつ秋の半も杉の戸にまつほどしるき初雁の声

九月 薄 鶉

花すすき草のたもとの露けさを捨てて暮ゆく秋のつれなさ

人めさへいとど深草かれぬとや冬まつ霜に鶉鳴くらん

十月 残菊 鶺鴒

神無月霜夜の菊の匂はずば秋のかたみに何をおかまし

夕日影むれたるたづはさししながら時雨の雲ぞ山めぐりする

十一月 枇杷 千鳥

冬の日は木葉残さぬ霜の色を葉がへぬ枝の色ぞまがふる

千鳥なくかもの川瀬のよはの月ひとつにみながく山藍の袖

十二月 早梅 水鳥

色うづむ垣根の雪のころながら年のこなたに匂ふ梅が枝

ながめする池の氷に降る雪の重なる年ををしの毛ころも

建保二年(二二四)二月、定家は、後仁和寺宮道助法親王が企画した「月なみの花鳥の

歌の絵」制作に係わり、その和歌を詠進するよう命じられた(『拾遺愚草』詞書)。前掲

した二十四首の歌がそれである。編集も了^おえ、二月廿日宮のもとへ提出されたが(『明月

記』同日の条)、その「歌の絵」がどのような作品であったのか、まさか和歌の詠進のみで

沙汰やみになったわけでもあるまいが、模本すらも伝わっておらず、詳細は不明と言う

しかない。おそらくは画卷か画帖であったと思われるが、障子絵であった可能性も捨て

切れない。

その意味で注目したいのが、鳥羽上皇の北面の武士佐藤義清こと後の西行(二二八)

九〇)が見たという、新造なった鳥羽殿の障子絵である。大治二年(二二七)十月十一日

義清は、上皇の命で、その色紙形に押すべき歌十首を詠進した。定家の詠進を百年余り

遡る。しかもこの場合は定家とは逆で、定家の場合が、詠んだ歌を踏まえて絵が描かれ

たのに対し、この場合は、すでに在る障子絵を見て詠んだ歌であった。屏風歌ならぬ障

子歌である。またその歌も、定家詠のような特に月づきの花と鳥を詠んだわけでもないのだが、幸いにもその元となった障子絵を知る手掛りが遺されている点で見逃し難い。むろん、当の障子絵自体が現存するはずもない。「西行物語絵巻」の当該段に描かれた鳥羽殿の障子絵が、それである。これまたそのものの姿を伝えるものではない。あくまで絵巻の小さな画中画に過ぎない。時代も当該絵巻の制作時期と重なるはずで、西行の活躍期からは大きく下る。だがいくつか遡る「西行物語絵巻」に登場する問題の障子絵は、同種の図様になる。そのことは、とりも直さず先行する「西行物語絵巻」の存在を伝えてくれているのだから、そこに描かれた障子絵は、先行本のそれや、さらに遡って西行時代のその姿をも彷彿とさせるに違いない。

ここではそうした中からサントリー美術館本のそれを掲げておく(図1)。全二十面、二面で二図の全十図。それらは背景の山並や地景でゆるやかに連続する。歌は二図一首の全十首。「西行物語」では、有難いことに各首それぞれに前書が添えられ、障子絵の図様までもが判明する。それら十首の歌すべてを掲げるべきだろうが、紙幅の都合で二首④⑤に限る。

夏(なつ)の初め、郭公(ほととぎす)を訪ねて山田(やまだ)の原(はら)の杉(まはらば)の群立(むらたち)に居(ゐ)て、眺(なが)めたる男(おとこ)の描(えが)かれたるを、
 ④聞(き)かずとも此(こ)処(ところ)を瀬(せ)にせむ郭公(ほととぎす)山田(やまだ)の原(はら)の杉(まはらば)の群立(むらたち)

郭公(ほととぎす)の初音(はつね)訪(まね)ぬる甲斐(かひ)ありて、聞(き)き付(つ)けたる所(ところ)描(えが)かれたりければ
 ⑤郭公(ほととぎす)深(ふか)き峯(たかね)より出(で)でにけり外山(とよま)の裾(すそ)に声(こゑ)の落(お)ち来る

いずれも郭公に係わる歌だ。十首という限られた範囲でもこうなのだ。この鳥に対する王朝人のこだわりが改めて知られるだろうが(定家詠でも四月の鳥、五月の花で歌われる)、その郭公を障子絵では⑤に対応する④図のみに描き、その前にくる④図には杉の群立つ山田原の二人連れを以ってした。しかも背景の繋がりによって両図はあたかも連続する一図のようにも見える。郭公はいるようで、いない。それならば、④の「聞かずとも」も生きる。屏風絵と屏風歌絵と歌とを交響させる。王朝文化の伝統が、西行にも、これを描いた絵師にも承継がされていたのだろう。むろん、定家にも、である。となれば、道助の「月なみ花鳥の歌の絵」は、さしづめこんな絵ではなかっただろうか。やまと絵の家土佐家を再興した光起(二六二七〜九二)の『定家詠月次和歌図巻』(東京国立博物館蔵)である。

ESSAY

例えばその初雁。遠く雁を眺める公家が描かれる。「眺めつつ」の語から想定されたのである。その彼に杉戸を開けさせている。季節は八月、秋も半ば過ぎの杉の戸と云うのである。まるで駄ジャレではないか、との非難が聞こえそうだが、光起は、大マジメ、掛詞も含め歌の意の細やかな表現が、ここにある。いや、図様はその最良の答えと云うべきだろうか。となれば、後仁和寺宮の企画した「月なみの花鳥の歌の絵」の八月を、光起のこの図から考えてみるのも無理ではないだろう。つまり「定家詠月次花鳥図」は、花と鳥を描くとは云つても、いわゆる「花鳥図」とは異なり、鳥羽殿の障子絵同様、歌と絵との交響を目指した「歌意図」であったと云うことだ。

とは云え、これが花と鳥を主とする絵であることに変わりはない。日本の「花鳥図」に決定的影響を与えていたはずだ。何よりこの「定家詠月次和歌」によって、各月を代表する花と鳥が選ばれ、わたしたちの季節感の表現に典型を与えられたことだ。このことの持つ意味は極めて重大である。

となると、これらの花と鳥を選んだのは誰であっただろうか。道助が定家に和歌の詠進を命じた時、すでにその歌題として花と鳥が定められていた——その可能性は全くないのだろうか。となれば選んだのは道助となるが、しかし、ここは確証もないままに、歌を詠んだ定家その人に、歌題としての花と鳥の選択も委ねられていたと見ておきたい。

その花と鳥。現代のわたしたちから見ても月々の顔として、それほど異和感はない。十一月の枇杷も、この頃この木が目立たない小さな花を着けると知れば得心がいく。

そして柳。定家はどうしてもこの木を春の、それも二月に置きたかったのだろう。春は「柳桜をこきまぜて」やって来ると言わんばかりである。その強い気持ちは、春を代表するもう一つの花・梅を、敢えて「早梅」と呼んで「年のこなたに匂」わせたことに尽きるだろう。春の柳、王朝人の眼と心を捉えて離さなかつたこの木をはじめ、他の花鳥を押さえておくと、日本の「花鳥図」の新たな顔が見えてくると思うのだが……。



図2 八月 鹿鳴草 初雁 土佐光起筆 東京国立博物館蔵



図1 鳥羽殿の障子絵 サントリー本「西行物語絵巻」より

この十月四日から、かつてない豪華な浮世絵展を開催しています。出品作品一四五点すべてが、重要文化財および重要美術品という、異例ともいえる浮世絵展です。

出品される作品は平木浮世絵財団（一九七二年設立）の所蔵品で、日本屈指の良質な浮世絵コレクションを所有することで国内外に知られています。

第2次大戦以前、国内の浮世絵三大コレクションとして知られた「松方コレクション」が東京国立博物館の所蔵となる一方、海外流出の危機にあった「斎藤・三原コレクション」を実業家・平木信二氏が入手し収集の礎としました。これらは、旧松方コレクションとともに、浮世絵版画としては唯一、重要文化財指定品を含んでいます。浮世絵は、木版画であるため、複数の作品が存在することから、重要文化財に指定されるものは極めて少なく、現在、重要文化財に指定されている浮世絵は四十点ほどです。指定された作品はきわめて希少なもので、摺りや保存状態も最高に良いものといえます。

平木コレクションは、重要文化財十二点、重要美術品三三八点を含む、総数

約六千点の浮世絵版画を所蔵しています。それらが特定の時期や絵師に偏ることなく、浮世絵の歴史を体系的に通観できる場所が高い評価に結び付いています。

浮世絵展というと、良く知られる絵師の名前ばかりが並ぶことが多いのですが、本展では、より幅広い絵師の作品をご覧いただけます。例えば鳥居清長で知られる鳥居派は、見る機会も少ない清信、清倍、清忠、清満らの状態の良い作品をご覧いただけますし、勝川派では、春章のみならず、春好、春英、春潮らの優品も並びます。

このように偏りのない広範な収集であるため、平木コレクションだけで浮世絵版画の発展の流れを概観することができま

す。こうした豊富な作品の中から今回は、重要文化財十点、重要美術品を百三十五点選りすぐり、このコレクションの見どころばかり、いわば珠玉の名品を展示しています。

鳥居派を中心とした初期浮世絵から鈴木春信、鳥居清長、喜多川歌麿、東洲斎写楽などの錦絵黄金期の巨匠たち、そして葛飾北斎、歌川広重、歌

EXHIBITION

川国芳ら幕末期の名だたる絵師たちまでを網羅しています。

重要文化財は国によって年間六〇日までの公開と定められています。そのため、あまり目にするのできない貴重な国指定重要文化財、重要美術品を、この機会にじっくりとご覧いただき、浮世絵の真の美しさ、華やかな時代の流れをご堪能いただけましたら幸いです。

企画展

重要文化財・重要美術品、ここに集結!

浮世絵の美

平木コレクション特別公開

村松和明



【重要美術品】東洲斎写楽《二代目嵐龍藏の金貨石部金吉》寛政6年(1794)
公益財団法人 平木浮世絵財団蔵

会期：平成26年10月4日(土)～11月24日(月・振休)

収蔵品展

そこに在るということ

—歴史・美術にみる存在の印—

仮託する・典型化する・写し取る・痕を残す・痕を消す

千葉真智子



マン・レイ《コートスタンド》1920年／1959年

「美術博物館」を名乗る当館には、実に多岐にわたる収蔵資料がある。それらをどのような切り口で紹介するかを考えることは、コレクションを持つ美術館、博物館で働く者にとつての仕事の醍醐味の一つだと思う。通常は美術分野を担当している私も、今回は、専門外の歴史・博物・民俗資料を出品作に入れながら、「存在の証」「存在の痕跡」をテーマに展覧会を構想しているところである。

そこで、まず注目したのは、そもそも造形活動に関わる一切は、洋の東西を問わず、本来、姿形のないものに形を与え、その存在を印づけ、あるいはそれらを記録に留めるためであったということである。その典型として挙げられるのが、何より「神」の表象だろう。古代日本において、「無相の神」は鏡や剣などを「依代(よりしろ)」とすることで表わされていたが、やがて絵巻や掛軸のなかで、社殿や鹿の姿に仮託され、仏教の伝来・普及以降は、仏や仏僧の姿、さらには「人形(ひとがた)」として表現さ

EXHIBITION

れるに至った。西洋における神の描写も同様である。礼拝の対象として制作されたイコンはその代表であるが、ここで重要なのは、人々がイコンの中に見ていたものが、イコンに描かれた人の姿ではなく、あくまでもその向こうにある「原像」だったということであろう。さらに言えば、偶像崇拜を禁止するユダヤ教やイスラム教においては、敢えて造形しないという「不在」の表象を通して、より神の存在が絶対的なものになっているのである。

人間の絵姿も同様である。古今東西、様々に描かれてきた肖像画。天皇や皇族など、高貴な者の顔かたちは、元来、描くのを憚られ、御簾に隠したり後ろ向きに描いたり、あるいは引目鉤鼻という「没個性」の姿で表されてきたのだが、その「不在」と化した描き方が、高貴なものの印として機能し、存在に強度を与えることにつながっているのだと言える。あるいは一目でそれと分かるような「型」として継承される歴史上の人物の肖像はもちろん、平安末期以降、そして西洋ではルネサンス以降、絶えず試みられてきた写実に基づく肖像画は、ルネサンスの理論家アルベルティが述べるように、死すべき運命に

ある人間に、半永久的な死後の生を保証する「存在証明書」となるのである。

こうした存在の印のなかでも、特筆すべきが「自画像」である。絵画の、また自画像の起源として言及されるナルキッソスの神話。水面に映った自分の姿に、我と知らずに恋焦がれたナルキッソスが命を落としたという古代の物語は、人間にとつて、自己が最も不可視の、不可知の他者であることを思い起こさせてくれる。私は、鏡を介してしか私を見ることができず、私のイメージは、他者の眼を介して、事後的に形成することしかできない。それ故「自画像」には、自己を見定めようとする芸術家たちのアイデンティティの探求が最も露わになっているのであるが、こうした自我の発露という近代の物語に対して、近年では、それを極限まで消去しようと試みる作家たちの行為を対置することもできる。それは、しかし、その不在を通して、その存在をいやおうなしに照らし出しているだろう。

まだまだ構想中の段階にあって、あまりにも雑多な話になってしまったが、見ていただいた方に、少しでも今回の展覧会の意図が届くよう、残り時間はわずかであるが検討を続けた。

会期：平成26年12月2日(火)～平成27年1月18日(日)

これを最後に少し昔語りを①

荒井信貴

美博暮らしもあと半年あまり。開館からすでに一九年目、準備室時代も含めると二〇年となる。開館時から間断なく勤めているのは私と掃除の杉浦たみ子さんだけとなってしまうている。心臓の病から復帰し、元気に動き回っている杉浦さんを見るたび、あと少し、私も最後の踏ん張りを見せなくてはと思う今日この頃です。

来年度は、空調機器や展示室壁の塗り替えなどの工事関係で一年間休館の予定で、再来年は、市制百周年、美術博物館開館二〇周年の企画が待っています。ここ数年は館運営の調整にあたっており、学芸にはあまり口を差し挟まないようにしてきたのですが、運営も現況では軌道にのり、展示企画も岡崎らしいスタイルもできたのではと思つているのですが、榎原館長、堀江学芸担当課長を中心とし、新たな方向性が生み出されるものと期待しています。堀江さんと出会ったのは岡崎市の採用試験の日。今から三五年も前のこと、博物館建設計画があり、当時珍しい学芸員枠での採用に二人して応募。初めて訪れる岡崎市で、理想の博物館についての夢を語りあったのですが、採用時点では、市長も変わっており計画も白紙となっていました。

嘸然とする中、堀江さんは、岡崎市一番の学芸員として三河武士のやかた家康館

の開館に尽力。こちらは文化財保護の担当としてただひたすら遺跡の発掘調査に汗を流す毎日が続いていきました。

一度は白紙となったものの計画自体は存続し、市の中央総合公園計画の中で再び浮上し、昭和六〇年には岡崎市総合施設建設推進委員会により建設の答申、同六二年岡崎市美術館・博物館調査検討委員会から「美術館・博物館建設基本構想について」の答申がされていきました。同じ課の仕事だったのですがあまり関わりを持たなかつたことは今から考えると残念なことでした。

昭和六三年八月、大和町の上宮寺から出火、市役所からも矢作川の川向うに炎と煙が立ち上がるのが確認できました。ただちに現場に急行しましたが時すでに遅く、市最大の古建築であった本堂は全焼、三河三か寺として知られ浄土真宗の名刹であることを示す多くの指定文化財が焼失してしまいました。翌日は火事場の調査。焦げ臭い臭いが充満する中、文化財の断片でも残っていないかと必死に探すものが見つかるのは近年のものばかり。揚句には他所に預けていたものも一時里帰りして一緒に燃えてしまったとの話を聞き、世の無常を感じるのみでした。それでも燃え残りの文書の断片、文字の残る掛け軸の

COLUMN & TOPIC

軸心等が、往時を語り継ぐ証人として僅かながら残されていたのが救いでした。二度とこのようなことが起きないように、岡崎の寺社の貴重な文化財を市で預かれるしつかりした収蔵施設が欲しいと実感したものでした。この事件もひとつの契機となり平成に入ると建物の設計・建設への動きは進み、平成五年二月、第一期工事として展示室と収蔵庫からなる収蔵庫棟の建設が発表されました。

さあ次は展示室で何を展示するからです。平成六年、大きな発掘現場を抱えているのですが、仕事を終わると夕方から人が集まってくる展示テーマ作りです。博物系の

展示について、現在、市文化財審議会委員を務める小林吉光、野本欽也の両氏、現名古屋女子大学短期大学部長遠山佳治

氏に堀江・荒井の両名を中心に話を進め、西三河を縦断する矢作川と歴史の道東海道、その南北の動きと東西交通の結節点としての岡崎、その特性に辿り着き、展示プランを練っていききました。

中々の力作だとの思っていたのですが、七年三月にあつさり否定されてしまいました。理由は郷土色が強く集客性、話題性に欠けるということ。郷土に根差した博物館を理想に掲げてプランを練ってきた我々には大きなショックでした。

美術博物館の大きな転換点です。その後のお話は次回に。

ふたつの芸術祭

千葉真智子

いまや全国各地で芸術祭が開かれているが、今夏、その先駆である横浜トリエンナーレと、初開催となる札幌国際芸術祭とに足を運んだので、感想を記しておきたい。

両者ともに際立っていたのは、現存作家の新作の集まりという、いわゆる芸術祭の典型スタイルを採らず、旧作（物故作家のものを含む）を多用しながら、あたかも美術館の企画展であるかのような筋道の通った内容を展開していたことだろう。とりわけ、美術家の森村泰昌をディレクターに据えた横浜は、「華氏四五」の芸術」と題して、意図的に、あるいは結果的に忘却させられ、されてしまったものへと私たちの目耳を向けさせる展示を企て、その沈黙と作家たちの誠実さとが支配する統一空間が非常に印象的だった。焚書によって、読書することが禁じられ、全てが忘却の彼方へと消失してしまう世界のなかで、自らが本というメディアとなつて語り続ける、「握りの人たち。レイ・ブラッドベリの同名小説（フランソワ・トリュフォーが映画化）に想を得たタイトル通り、会場には、忘却に抗おうとする作家たちの活

動の残滓が認められる。そのなかには、戦後敢えて言及されることなく忘却されてきた、太平洋戦争中に、戦意高揚のために筆を執った北原白秋や高村光太郎の詩や歌を丹念に集めた大谷芳久コレクションがあり、また対象的に、敗戦によって価値が一変してしまった日本において「リッパナヒト」になつてほしいと望む親の素直な感情をしたためた松本竣介の愛息への手紙が含まれており、「言葉」の重みを実感させられもした。

札幌では、フクシマの現況を受け、都市と自然を見つめ直す展示が試みられていた。新作は少なく、新作であっても、既視感のある作品が多いのが残念であったが、予算等の制約も、おそらくあつたのだろう。そうしたなかで、眼を引いたのが、雪の結晶の研究者であつた中谷宇吉郎が撮影した天然雪と人工雪の写真である。科学によつて自然の豊かさや可能性を発見しようとした中谷の態度は、本芸術祭を象徴するものだろう。良くも悪くも両芸術祭共に、いわゆる芸術作品以外のものが放つ強さが印象に残つたのであつた。

COLUMN & TOPIC

伝統と現在

湯谷翔悟

和紙は生きている。それが魅力です。

初日の交流会で、和紙アーティストのリチャード・フレイビン氏に「和紙の魅力って何ですか」と問いかけてしまった。不躰な質問にも関わらず、氏は即座にそう答えてくれた。

九月下旬、愛知県立芸術大学の研修旅行に同行させてもらった。この旅行は日本中の和紙ゆかりの地を巡るもので、八回目になるという今回は、東北・北関東を主に巡つた。

「和紙は生きている」。この言葉を初日に聞いたことで視点が定まり、旅の密度をずっと濃くしてくれたと振り返つて感じる。今回四つの和紙産地を巡つたが、漉き方はいずれも違つていた。例えば小川（埼玉県）は比較的力量強く前後左右に揺らすが、遠野（福島県）はゆつくりと前後のみに動かすというように。そしてその違いは、原料や紙の用途、さらには漉く人の違いなど、諸条件によつて生じていた。製法の違いは当然生まれてくる和紙の特徴に結びつく。和紙は生きているからこそ、産地の地域性や環境、漉く人の人となりなどにより、それぞれに

「個性」を持つといえよう。それは子どもが親や周囲の環境に影響を受けて育つのによく似ている。フレイビン氏の意図とは恐らく異なるが、和紙を「生けるもの」として捉えることで、各地域の和紙の「個性」が何に基づくのかがという点に注目して見学することができた。

和紙は伝統産業である。しかし和紙が生きているということは、現代の状況からも影響を受けているはずである。原料や道具の調達、技術の伝承を取り巻く状況は、昔と今とは大きく異なる。さらに福島では原発事故という深刻な出来事もある。伝統を守り受け継ぐことは必須の責務であるが、伝統が息づいている現在を、変容も含めて記憶・記録していくことも、今を生きる大きな務めであると感じた旅であつた。



INFORMATION

浮世絵の美

10月4日(土)～11月24日(月・振休)

■講演会「浮世絵の魅力—世界を魅了したその真の美しさ」

11月9日(日)午後2時～

講師：村松和明(当館学芸員)

■学芸員による展示説明会

10月19日(日)、11月16日(日)

いずれも午後2時～

そこに在るということ—歴史・美術にみる存在の印—

12月2日(火)～1月18日(日)

■学芸員による展示説明会

12月21日(日)、1月11日(日)

いずれも午後2時～

当館は、改修工事を行うため、平成27年4月1日から平成28年3月31日まで、休館します。休館期間を含む年間パスポートをお持ちの方は、通用期間を1年間延長扱いとします。

眠れていますか？

夜、眠る。これについて人それぞれに大なり小なりのこだわりがあるはず。自身について言えば、布団は綿布団に限る、これである。あつしりとした重さがなくてはと愛用し続けてきた。ところが、昨年布団を新調するにあたり、体調維持や体への負担を考えて、思い切って掛け布団を羽毛に替えてみた。とつても軽い、今更ながらである。保温性に優れていることは承知していたが、重さを感じさせずに包み込むようなふんわり感、これが実に良い。季節に関係なく熟睡できる性質ではあるが、ワンランク上の眠りを手に入れた嬉しい気分になった。これまで半世紀近くにわたるこだわりは何だったのか。どんな人も眠りなしでは生きていけない。何の苦もなく当たり前で寝られる人の一方で、眠れない寝付けないとお悩みの向きも多いのが現代社会。薬の助けを借りるのも別段珍しいことでなく、また、眠れるのはいいが呼吸が不規則になる症状に悩んでいる人もあり、眠りの夜は複雑かつ多様である。自身の睡眠は質の段階になったと感じるこの頃、幸いにして毎晩ぐっすりとお眠りできる。ということは、毎日の1/3から1/4を幸せに過ごしていることになるのだろう。快眠、良質な眠りに感謝である。(伊)

おしゃべり、あれこれ。

秋の手紙

少し、心が疲れることがありました。こういう時は、よく眠るようになっています。眠ると身体が元気になるように、心も元気になる気がするからです。眠っている間は、周りの雑音から解放され、好きな人にも逢えます。空を見るのも良いです。空が青く晴れると、なんだか心も晴れるようで嬉しくなります。曇っていたり雨が降っていても、自分に寄り添ってくれている、と勝手な解釈をして、救われたりもします。あとは、音楽を聴いたり本を読んだり、おいしいものをお腹いっぱい食べたり。やさしい誰かに話を聴いてもらったり。これからの季節なら、ゆつくり湯船に浸かるとか。心を癒すためには色色な方法があります。一番願わしいのは、その根が解けることだと思っています。ただ、一つのそれが解かれるには時間が掛かることもあるため、色色を試しています。だましました。心が疲れている時にしか見えないうものもあります。小さな優しさが身に沁みて、自分の傲慢さを反省できます。この根も、暫く経てば解かれるでしょう。それまで目を凝らし、耳を澄まして、無駄な疲れではなかったと思えるよう、日々を丁寧に過ごしたいです。秋冷の折、風邪など召されませぬようご自愛ください。(若)

編集後記 | 今年は浮世絵の当たり年なのでしょうか。当館では平木コレクションによる浮世絵展が始まりましたが、近隣を見渡しただけでも、既にポストン美術館で北斎展、名古屋市博物館で大浮世絵展が開催され、時期を同じくして松坂屋美術館では、氏家コレクションによる肉筆浮世絵展が開催されています。この機会に浮世絵にどっぷりと浸かっていたいただければと思います。かくゆう私も浮世絵ブームのなか、習得したばかりの透視図法を駆使した「浮絵」と呼ばれる初期浮世絵の奇妙な画面構成の面白さに、眼を開かれる思いがしました。(千葉)

表紙図版：鈴木春信《風流七小町 潜水》明和5～6年(1768-1769)頃 重要美術品



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第62号 2014年10月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA